

資源循環研究プログラム

委員会からの主要意見
現状についての評価・質問等
○プログラムとして取り組むべき課題は網羅されており、第3期中期計画からの継続性を含めて妥当な設計である。
○非常に網羅的で緻密な研究計画が策定されており、研究課題の明確化とともに、PJの計画に構造的な取り組みがなされている点は評価できる。
○CO2 限界が資源循環に対して、どのような影響が及ぶか、その検討の過程で、再び LCA の登場を促すような気もするが、このあたりの対応策は準備されている。
○アジア地域を対象にしたとき、その国の社会のマインドが日本と全く違うという状況が、「アジア圏における」という言葉の中にどのように含まれているのか？
今後への期待など
○中長期展望につながる取り組みを地道に検討すること(たとえば、炭素のネガティブエミッション対応や資源効率展望の先にある生産・消費・循環構造といった趣旨)も期待する。
○途上国への成果のアウトプットを念頭に置いているプログラムについては、社会を変えるための政策に繋げるため、成果の“見える化”が強く期待される。
○“Recycle”ではなく、“Sound material cycle”を使っている意義に立ち返り、人間活動の支援に必要な機能を提供するための社会システムにおける課題を洗い直して見ることも必要な課題であろう。Material やエネルギーの使い方を含めて、そのためにはどのような社会のシステムが望ましいのか、地道に取り組んで見てもよいのではないか。
○全体として処理技術・処理システムに重点があり、消費側の視点(sustainable consumption)あるいは取り組みが見えない。統合プログラムとのより積極的な連携が望まれる。

主要意見に対する国環研の考え方
①第4期の循環PG全体の設計にご理解頂き、ありがとうございます。
②PJの数を3から5に増やすにあたり、確かに技術系のPJを2つ(主にアジアと国内の各々が対象)としていますが、消費者基準による資源利用の解析や、消費者の視点にも近い人口減少・高齢化など社会変化に適応した循環型社会設計も2つのPJで取り上げます。
③資源循環構築における低炭素化の評価は個々のPJでも努力するとともに、PJ1とPJ3を中心に統合研究プログラムとも連携します。
④資源効率展望の先にある生産・消費・循環構造や望ましい循環型社会像については、第4期ではPJ1やPJ3における持続可能性評価や循環の価値を高める社会システムづくりといったテーマで対応しながら、長期的な展望ももって検討を進めたいと考えます。
⑤主にPJ4でアジア地域を対象にしますが、日本以外のアジア圏の社会のマインドとして、都市特性、経済状態、社会受容性を含めて考えており、上位の都市計画等と調和した将来の廃棄物処理制度・システムとその評価手法を確立しようとしています。